瑞典皇室と臼杵石仏

仲　嶺　真　信

【要　　旨】

本稿は、大正15（1926）年に臼杵石仏を訪問された瑞典皇太子に焦点をあてている。特に石仏訪問の契機及び石仏訪問の具体的内容に関して言及したものであり、すなわち、皇太子に随行し、案内説明を行った濱田耕作『考古游記』に見える関連事項、また大分県地元紙『豊州新報』及び『大分新聞』中の記事を詳細に分析し考察を試みたものである。

【キーワード】

瑞典皇室・グスタフ６世アドルフ、臼杵石仏、濱田耕作、豊州新報、大分新聞

はじめに

平成28（2016）年は、臼杵石仏国宝登録指定（1995年）から回顧すると21周年目にあたる。同時に小川琢治博士が、大正２（1913）年出版した『日本石仏小譜』収録の図版（現存する最古の写真）による臼杵石仏紹介の時から数えて、すでに103年目を迎える。本稿で筆者は、過去の記念すべき喜ばしき出来事、すなわち、大正15（1926）年当時の貴重な記録「瑞典皇太子同妃両殿下の臼杵石仏訪問」について、地元新聞（大分新聞／豊州新報）記事及び濱田耕作『考古游記』*1等を通じて振り返りながら、その意義を探りたい。

鈴木希帆によれば、大正15年の出来事として、日本考古学の世界では、スウェーデンの国王グスタヴ６世・アドルフ（Gustaf Ⅵ Adolf, 1882-1973）の皇太子時代の来日はよく知られているという*2が、厳密に言えば、大分県ましてや臼杵石仏との関わりについては、日本人の中では、ほとんど知る人はいないと考えられる。ちなみに、臼杵石仏は、大正時代当時の一般の人々にはまだまだ周知されていなかった。しかし、瑞典皇太子同妃両殿下の臼杵石仏訪問を機会に、日本人はもとより地元県民にとっても空前絶後の歴史的記念となり、また文化遺産の維持・保存に関わる重要な提言を得る機会ともなった。この重大な記念すべき訪問の意義について、大正15年10月５日付『大分新聞』は次のように記す。

「瑞典皇太子、妃両殿下を本県にお迎へして、元町及び深田の石仏を見ていたゞくことは、有史以来の大事実だと云つても毫も誇張の言ではない」*3（下線は筆者）

同年10月８日付『大分新聞』は、全行程を随行された山縣式部官の次の謹話を記す。

「あす（七日）からは、予定の通り県下を御視察になるのであるが日本人でさへ知らぬ人もある石仏が外国の皇太子により紹介される事は日本人の光栄だと思ふ」*4（下線は筆者）

さらに同年10月８日付け『豊州新報』は、第１面の全面において、瑞典皇太子殿下同妃殿下の肖像写真及び日瑞両国旗を掲げた上、歓迎特集記事を組んでいる*5。（図１）

WELCOME
THE HOSHUSHIMPOSHA
OITA CITY, JAPAN.
豊州新報
北歐瑞典の光輝ある歴史
敬仰すべき瑞典皇太子殿下其御人格と御經綸

図１　豊州新報歓迎記事
大正15年10月６日朝刊１面

以下、当時の瑞典皇太子殿下（The Crown Prince of Sweden）の臼杵石仏訪問の詳細について、本稿において歴史的意義を再確認しながら詳述していくが、なお、その前に大正15年当時皇太子であり、後のグスタヴ６世アドルフ（Gustav Ⅵ Adorf）について説明しておく。

【１】瑞典国グスタヴ６世アドルフ

グスタヴ６世アドルフについて、人名辞典の説明によると以下のとおりである。

グスタヴ６世アドルフ（Gustav Ⅵ Adorf　1882–1973）

「スウェーデン国王（1950–73）、グスタブ５世の息子、ストックホルム生まれ。ウップサーラ大学に学び、考古学者そして中国美術の権威として尊敬を集めた。治世の間に新憲法の準備が進められ、王自身、王権制度を民主君主制にするため尽力したが、逆にそのことが共和制を求める政治的要求をおさえて、王権を維持する働きをした。長男のグスタヴ・アドルフ（1906–47）は飛行機事故のため死亡。そのため、孫にあたるカール16世グスタヴが王位を継ぐこととなった」*6

上記において、残念ながら1926（大正15）年日本を訪問した事実に一切触れていない。

しかし、日本訪問の事実に関しては、角田文衛の「スウェーデン国王グスターヴ６世の逝去」において詳しく知ることができる。

すなわち「（前略）皇太子は1926（大正15）年９月初旬、アメリカを経由して日本を来訪し、朝野の歓迎のもとに約１ヵ月を過ごされた。この時、東京大学は、千葉県の柏井貝塚を発掘して観覧に供した。皇太子は、関西でも各方面を見学されたが、中でも熱意を注がれたのは正倉院であった。すなわち皇太子は、９月28日から２日半を正倉院で費し、精細に御物を観察された。特に緑釉陶器は（中略）、唐からの舶載ではなく、和製であろうと指摘し、浜田博士以下の随行の学者たちに衝動を与えられた。研究心の旺盛な皇太子は、短い滞在期間に**豊後の石仏まで見学**され、次いで朝鮮に渡られた。皇太子が慶州の**瑞鳳塚**において、10月10日、金冠を取り上げられたことは、学界周知の事実である。この滞留期間において皇太子は、考古学者としての鋭い観察力と逞しい研究心を遺憾なく発揮されたことであった」*7（下線と強調文字は筆者）

上記は、考古美術の研究者としての皇太子の姿を如実に伝えており、特に豊後石仏訪問の経緯については、濱田博士の積年の功労なくしては語れない。その点については、本稿において詳しく触れたい。

【２】瑞典皇太子同妃両殿下の臼杵石仏訪問

（１）大分訪問以前の経由地と大分訪問

先述のとおり角田文衛によると、瑞典皇太子御一行の日本訪問は、アメリカ経由であったことが分かる。また日本国では各地の古蹟を訪問され、その中の一つが臼杵石仏訪問であった。この様子をもう少し他の文献を含めて詳しく見ると、次の事柄が分かる。

９月２日横浜（港）安着*8。以下、鈴木希帆によると次のとおりである。

「９月14日東京帝国大学、東洋文庫、東京帝室博物館：東京帝国大学では中央大講堂回廊に展示された人類学及考古学の陳列品を見学。９月15日姥山貝塚（千葉県市川市）：松村瞭*9の案内にて皇太子自ら発掘、大山柏*10も参加。９月16日東京帝国大学：皇太子、列品のノートを希望し再訪。９月17日予定、吉見百穴（埼玉県比企郡吉見町）：雨天と病気のため訪問取りやめ。９月26日京都帝国大学：濱田耕作の案内にて見学。満州の出土品に興味を惹かれる。関西旅行中。伊勢神宮、石山寺、広隆寺、正倉院などにも立ち寄る。奈良滞在中の三日間は全日正倉院に通う。大阪では住友男爵の中国銅器コレクション、石山寺では下郷傳平*11の石器時代コレクションを見学。９月27日濱田耕作にスウェーデンのラサ第三等勲章を授ける」*12

一方、地元大分の新聞と濱田耕作『考古游記』*13を基本とし整理すれば、以下のとおりの旅程となる。

「京都（９月24日～28日）*14、奈良（４日間）、和歌山（高野山：10月２日）*15、大阪、神戸：５日午前８時舞子の住友別邸*16を出発、同９時神戸メリケン波止場着。山縣兵庫県知事*17、保倉税関長*18、黒瀬市長*19等の見送りを受け、３時半頃*20軍艦木曽*21（図２）に乗艦出航*22。宮島：５日日没前６時頃到着、宮島ホテル*23で小憩後、岩惣ホテル*24にて広島県知事*25主催日本食の宴会に列す*26。６日宮島ホテルにて午前７時朝食、同９時雨を冒してホテル発厳島神社参拝、菊池宮司の捧げた玉串を奉奠の後、宝物を御覧の上、零時（正午）鉄道桟橋より艦載水雷艇にて木曽に乗船*27。

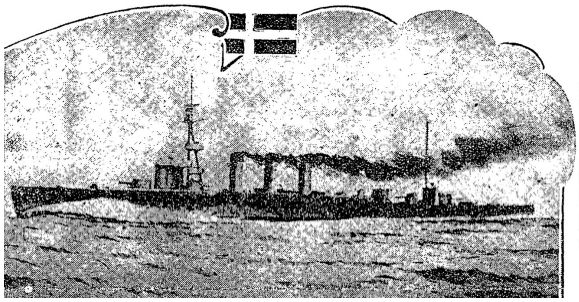

図２　巡洋艦木曽　豊州新報大正15年10月７日夕刊１面

大分：日没前別府湾に投錨*28。６日午後５時別府着、両殿下は木曽の内火艇*29（ランチ）、随員は警邏船由布丸、御荷物は大分丸で夫々商船桟橋に上陸*30。濱田博士や安保呉海軍鎮守府司令長官*31の案内で６日午後５時20分来着*32。宿泊所は亀の井ホテル*33。双川警察部長*34は日名子旅館*35に５日より止宿。別府市よりの献上品は籃胎漆器の手文庫一対。８日午後２時51分（予定）別府駅発列車で門司へ*36。

山口：（８日）下関「山陽ホテル」*37にて晩餐会、（９日）11時前昌慶丸*38にて韓国へ*39、慶州：10月10日」

以上が大分県訪問から下関経由韓国に至る旅程である。ちなみに別府来着の際に呉軍港より差し回された軍艦は、以下の通りである。

殿下・妃殿下：御召艦「木曽」、特務艦「勝力（敷設艦）」[*40]「諏訪（特設艦）」[*41]、随員一行：「報国丸」[*42]

（2）大分訪問の日程と随員及び接伴員

当時の日程を確認してみよう。大正15年10月５日付「大分新聞」夕刊４面の記事[*43]に拠れば、次の詳細な日程が分かる。

すなわち、一行の発着についての場所と時間（所要時間を含む）が詳細に記載されている。表１には、10月７日宿泊先（別府、亀の井旅館）から大分市（元町）を経て臼杵（深田・臼杵公園）までの往復路の全行程を示す。表２には、10月８日宿泊先（別府、亀の井旅館）を出発し、別府の三カ所（血の池・海・鶴見）の地獄巡りを終えて宿泊先までの行程を示す。表３には、瑞典皇太子同妃両殿下及び随員・接伴員の一行について列記する。実際は、多少の時間のズレは生じたものの、ほぼこの日程通りで無事推移した。

表１　十月七日御発着時間表

（自動車速度市中10哩／其の他12哩乃17哩）

発着地	時　　刻	備　　考
御旅館	御発　午前　８：30	
元町	御着　同　　９：15 御発　同　　９：45	御旅館より元町迄４里 所要時間45分 30分間
深田	御着　同　　11：00 御発　午後　０：40	元町より深田まで８里 所要時間１時間15分 １時間40分間「御徒歩にて　往復16町」
臼杵公園	御着　同　　１：00 御発　同　　２：30	深田より公園迄１里４合 所要時間20分 １時間30分間
御旅館	御着　同　　４：45	臼杵公園より御旅館まで13里４合 所要時間２時間15分間

表２　十月八日御発着時間表

発着地	時　　刻	備　　考
御旅館	御発　午前　９：30	
血の池地獄	御着　同　　９：55 御発　同　　10：10	15分間
海地獄	御着　同　　10：25 御発　同　　10：45	20分間
鶴見地獄	御着　同　　11：05 御発　同　　11：10	５分間
御旅館	御着　同　　11：20	

表３　御一行人名

皇太子グスタフ・アドルフ親王殿下、同妃殿下
（随員）東宮大夫ニルスド・ルーデベツク、同夫人、 瑞典公使館一等書記官ウエンネルベルグ、 東宮武官陸軍大尉オースプリンク*44、従者一名、侍女二名、 計九名 △接伴員三名（山県式部官*45、武藤外務事務官*46、相馬式部官*47）外に濱田博士、小川博士、宮内属二名（田畑属*48、中根属*49）雇員二名（落合雇、佐藤雇）別に雇員一名（竹田雇）、ボーイ二名（増谷、三神）、計十一名、総計二十一*50名

なお、瑞典国随行員として見える以下の●の人名は、濱田『考古游記』*51に拠る。

●ルデベツク氏夫妻（＊『考古游記』に京大文学部陳列館前にて撮影の集合写真中に皇太子同妃両殿下と共に夫妻及び随行員の姿もあり）

●オスプリンク大尉

●ウエネベルク書記官

上記に見られるように、この時の宿泊所として亀の井ホテルが選定された。専用の部屋は、当時新築したばかりの亀の井ホテル三階の五十号室洋室*52であった。

以下に、宿泊所に選定された亀の井ホテル主人油屋熊八のことばを紹介しよう。

> 実に無上の光栄であります。我大分県が国賓殿下を迎へ奉るのは今回が始めです。而も其の御旅館に選定された事は私の一生を飾るのみならず亀の井ホテルの歴史的光栄です。殿下には非常に平民的であらせられなるべく儀礼的な事を避けるやうに仰せられ海水浴や御登山等の運動が御好みの由漏れ承つてゐます云々*53

（３）来日の目的と理由

当時の豊州新報の記事に基づき、具体的に引用しながら紹介しよう。

> **殿下の御希望は　純日本の古美術を　御鑑賞遊ばさるるにある**
> **我が大分県の光栄**
>
> スキーデン皇太子殿下今回の御来朝は（①）我が皇室との御交驩の目的の外に我が国体の真髄と建国の由来とを鑑賞あらせられ考古学御研究の資とせられると共に外国文明に浸潤せざる
>
> 純日本の民情を味はひたいとの御希望（以上①）なので当局も特に此の点に考慮し御祭騒ぎ式の御歓迎を申上げることを避け心から御歓待してひたすら殿下御来朝の目的にそはんことを期してゐる次第であるから我県民一般も宜しく此の意を体し御愉快なる御印象を得られるやう諸事に心掛けなければならぬ、（②）殿下の御来県は申すまでもなく大分市元町の石仏及び臼杵深田石仏御覧の思召に基づかれたものであるが殿下が始めて我県の石仏に関する御知識を得られたのは京都帝国大学教授濱田耕作博士が献上した自著『豊後磨崖石仏の研究』によるものに外ならぬ（以上②）、同著書は京都帝大文学

部考古学研究報告の第九冊で　昨年八月発行されたものであるが内容は大分市上野元町大分郡稙田村大野郡菅尾並に北海部郡臼杵町深田等大分県下の各石仏に関する詳細な調査研究の結果を約百五十頁に亘つて記載し尚巻首の大分市上野元町の岩薬師如来像の図版を始め約八十葉の図版並に凡そ五十の挿図を附した完璧のものである、

尚ほ今回殿下の御視察に際しても右著者たる濱田博士は自ら御説明役として御案内申上ぐる事となり供奉員に加はつて居る次第であるが大分県としては此の豊後石仏が世界的に紹介されるの機会を与へられた殿下に対し我県の一大光栄として深甚の敬意を表しなければならぬ*54

（括弧内の数字及び下線部は、筆者加筆）

上記の内容を整理し要約すると、以下のとおり示すことができる。

１）目的と理由

①瑞典国と日本国との交驩（交歓）の他に日本の国体の真髄と建国の由来とを鑑賞し、考古学御研究の資とすると共に純日本の民情を味わうこと。

ちなみに、東京近郊では千葉*55関西地域でも各地を訪問された。

２）特に大分訪問の目的と理由

②大分市元町の石仏及び臼杵深田石仏見学を希望。理由は、瑞典皇太子殿下に来日の前（大正14：1925）年８月に京都帝大教授濱田耕作博士が『豊後磨崖石仏の研究』を献上したことが契機である。

ところで瑞典皇太子殿下は、特に考古学分野の学識が豊富で、中国をはじめ広く東洋文化に対する関心と造詣が深かった。その理由は、20世紀初頭、瑞典のアンダーソン博士（地質学・考古学）により北京原人をはじめ、仰韶遺跡及び彩文土器等の発見されたことと深く関係していた。ちなみに、東亜考古学の立場から濱田博士は「考古学者としての瑞典皇太子殿下」という一文において次のように述べている。

「（前略）殿下は1921（大正10）年設立の東方学会の設立者の一人であり、又その会長となられたが、同時に1918（大正７）年設立の『支那委員会』の会長でもある。（中略）この支那委員会の後援によつてアンダーソン教授が、考古学的未開の大分野なる支那において、地質調査の傍遂行した研究が、如何に科学的であり、如何に重大なる寄与をなすに至つたかは、既に我々が今日東亜考古学の最も重大にして、且つ興味ある問題の一として取扱ひつゝある彩色土器の発見者が、アンダーソン氏にあるといふことを、一言するだけで足りると思ふ」*56

このように学術上、東亜への関心が増幅していく最中の大正14（1925）年、濱田博士は『豊後磨崖石仏の研究』を殿下に献上され、それが契機となって大分訪問が実現した訳である。

【３】臼杵石仏訪問の内容

先述のように瑞典皇太子の大分訪問は、濱田博士の献本に起因するものであった。次に臼杵石仏訪問を小項目（１～４）に分けて紹介しよう。『考古游記』では次のように記す。

（1）大分市内石仏から臼杵石仏へ

「次の日は朝八時半出発大分から臼杵の石仏廻り、十余年前小川博士が草深い中から学界に紹介せられて、今日殿下の御覧を仰ぐまでに名を得た石仏を、博士自ら殿下に説明せられたのは、定めし感慨深いことゝ想像に余りある所である。先づ大分元町、龍ヶ鼻の石仏から、岩薬師へ行くと、路傍に合掌する老婆の座してゐるのも可憐である。此処から十里ばかり美はしい田舎道をドライヴして十一時頃深田へ著き、石の鳥居から堂ヶ迫、隠れ地蔵、大日山と巡覧し、十三仏の前では小学の女生徒の給仕の茶を取り、田舎煎餅をも口にせられ、次いで仁王像、長者夫妻像、宝篋印塔へ歩を移されたが、殿下は石仏の製作を賞せらるゝ外、特に此の石塔の形を喜ばれ、又た妃殿下は彼の美くしい石仏の下に、白ペンキの制札の無風流に立つてゐるのを悲しまれた。多年石仏の研究者たる小城翁には、特に握手をして深田を去られ、一同臼杵の町へ向つたが、町内の御道筋に葉の付いた竹竿と旗とを以つて、心からの装飾をした光景に殿下は大に喜ばれ、遂に自動車を止めさせ之を撮影せられた」*57（下線筆者）

上記において、臼杵石仏の最初の紹介と研究を行った小川博士の説明を受けながら、石仏を巡拝する様子が克明に記録されており、臼杵石仏研究上の貴重な資料となっている。あわせて「白ペンキの制札の無風流」な設置に関する妃殿下からの指摘は、文化財保護への関心の高さを示すものであり、きわめて適切なものであったと言えよう。

ここで登場する小城翁とは、小城長次郎のことであり、永年臼杵町役場で書記として奉職された人物である*58。（図３）

図３　ホキ石仏前の瑞典皇太子と小城長次郎
大分合同新聞社提供

（2）臼杵石仏等の訪問日程

ここでもう少し具体的な状況について述べてみよう。当時の地元紙大分新聞は、歓送迎の様子を次のように掲載している。

臼杵町の奉送迎
場所指定者決定す

スエーデンの皇太子殿下臼杵深田石仏及び臼杵公園御成につき公園指定の場所において奉送迎者左の通り定められた。

一、七日午前十一時深田御着御徒歩にて石仏御視察
（此間一時間四十五分）
二、深田御発午後零時四十五分
三、公園御着午後一時（御昼食後一時三十分間御休憩）
四、公園御発午後二時三十分　右御往復共自動車に御召

△公園指定場所にて奉送迎者（有位帯勲者、各官衙長及職員、県会議員、町会議員、町村長、新聞記者、神職僧侶及諸宗教師、区長及区長代理者、学校長、赤十字社員（徽章佩用のこと）、愛国婦人会員（同上）

△煙火は深田御着のとき合図に一発、専売所前御通過のとき往復とも各一発宛、公園御着のとき一発、公園御発のとき一発*59

上記のとおり、深田到着以降、熱心な瑞典皇太子は、臼杵石仏の見学時間に１時間45分を要している。石仏見学後は、臼杵公園にて眺望を楽しみ、亀の井ホテルが調理した御昼食を済ませ、臼杵町より献上の記念品を御嘉納し、別府まで復路を自動車で辿っている。その間、多くの奉送迎者に歓迎されていることが分かる。

（３）熱心なる臼杵石仏見学と盛大な歓迎

瑞典皇太子御一行の臼杵石仏の見学は、以下の順路と内容で推移し、大歓迎を受けた。以下その内容を伝える記事を紹介する。

美しき秋色を賞でつゝ　臼杵町深田へ御着
大芸術品をつぶさに御探究の上　大友城趾臼杵公園へ　奉迎装飾をカメラにお収め

大分市元町の石仏御視察を終らせられた御一行は九時五十分同所御発車稙田、判田、戸次と順路沿道到る所小学生、青年団、在郷軍人、一般村民等の　熱誠なる　奉迎を受けさせせられ小川の辺に紅に燃ふる彼岸花、農家の垣根に乱れさくコスモス或は僅に紅葉せるるはぜの紅葉等に心行くまで華やかな豊の国の秋色御賞美ありつつ山峡を一路長駆、吉野、南都留各村を経て十一時五分臼杵町深田御着　御待受け　した東臼杵町長の御先達で田圃路数町を御徒歩

先づ洞ヶ迫集団仏（本尊阿弥陀）より同上集団仏（本尊地蔵菩薩）更らに谷を距てた隠れ地蔵（本尊釈迦牟尼仏）背面通称十三仏（本尊大日如来）等小川、濱田博士御説明の下の千古の芸術の跡を詳に御視察、しばしば　カメラに　収められ同所に設けられた御休憩所に御休憩下南都留校女生徒七名茶菓の御給仕申上げたが殿下にはこの可憐な女生徒をおいつくしみありて　女生徒を　列立の上御撮影あらせられた、次いで真名長者、満月寺跡に向はせられ由緒深い多重式石塔跡、釈迦堂跡、怪奇な仁王像、石層堂址、宝篋印堂（堂は塔の誤記：筆者訂正）等順次御熱心に御覧あれせられたる後零時三十分御名残惜し気に深田御発　盛大なる　臼杵町民の奉迎裡に同五十分御饗食所に当られた風光明媚な丹生島城趾臼杵公園に御着あらせれたが途中軒毎の青笹に日瑞両国旗をつるした美麗な臼杵全町の奉送迎装飾を　頗るお喜　びあり本町筋にて少時車を止めさせられ車上その景色を御撮影遊ばされた*60（図４）

図４　臼杵公園に於ける瑞典皇儲妃殿下
大分新聞大正15年10月８日朝刊７面

（４）臼杵町の熱誠な歓迎に対し感謝

下記の記事に見られるとおり、石仏見学にご満足の瑞典皇太子は、臼杵町民の熱誠な歓迎に対し感謝の言葉を残している。

臼杵町の　熱誠な歓迎を謝す　殿下より有難き御言葉
「町内の装飾も見事」

スエーデン皇太子同妃両殿下には七日臼杵町に成らせられ臼杵石仏を御解察後町民の歓迎裡に臼杵公園に御足を運ばせられたが両殿下には非常に御満足の模様で特に東町長を御召の上親しく左の如き有難き御言葉を賜はつたので東町長はすこぶる感激した

一、深田石仏は誠に見事なものである、同地方に於ける部落民及び学校生徒の熱誠なる歓迎を謝す

一、臼杵町沿道は見事に飾られ町民及び学校生徒の熱誠なる歓迎を謝す余は町内の装飾が誠に見事なるを以つて特に車を止めて市中にてこれを撮影し記念とすべし　右町民及び学校生徒に対し同町長より謝意を伝へよ　よつて東臼杵町長は八日右の旨を書面で各学校長並に各区長に宛之れを伝達した*61

【4】瑞典皇太子の訪問の意義

この訪問を通じて皇太子殿下は、下記の記事に窺える文化財としての意義を踏まえた卓見を披露されている。

（1）瑞典皇太子の卓見

何れの石仏も天下の逸品　夫れぞれ批判的に御鑑定
最高学者と御意見一致す　御鑑識の高きに感激
北欧殿下　御視察　御感想につき両博士謹話

瑞典皇儲殿下の石仏御視察に対する御感想の一端を洩れ承はるべく小川、濱田両博士を訪へば階下応接室に於て両博士はこもごも左の如く語られた皇儲殿下には予て著書により或は写真絵端書等により充分の御鑑識を供へられ且つ高野山奈良等に於て殆ど同種類の石仏を御視察になられた（①）ので別に特別の御下問に接した事はなかつた
元町岩薬師像
深田の石仏では堂ヶ迫の集団仏は何れも逸品であると御嘆賞十三仏中の大日如来は最も傑作との御批判があり真野長者夫婦の石像も御賞揚蓮城法師像は作が新らしいと御判断（②）遊され宝匡部塔（③）の如きは頗る御感興を湧かせられたが此の御批判御断定は何れも我国の学者の説と一致する等美術的御鑑識の高く在はす（④）に敬服申上ぐるの外なかつた而し元町深田両所共保存の不完全な事に御遺憾の様（⑤）で且つ彼の木棚や制札が貴重なるに比し極めて非美術的である為め堂ヶ迫の集団仏や十三仏の制札の如き其位置の変更地点迄も御留意（⑥）を垂れられる尚大日如来像の如き其附近を厳重詮索一片の破片も蒐集を怠らない様したい（⑦）ものだとの御言葉もあつた　云々*62
（括弧内番号及び下線部は筆者加筆）

下線部①では、既に近畿において同種類の石仏を視察されていたので、石仏には馴染んでおられたことが分かる。

②については、見識の高さが窺える。③の「宝匡部塔」は、宝篋印塔の誤記である。④は小川、

濱田両氏とも一致する見解として美術的御鑑識眼の高いことに触れている。⑤は、石仏の保存対策が、徹底せず不完全な事に遺憾の意を表明されている。⑥は、木棚や制札等の表示方法が、有意義ではあるが、その割には極めて非美術的というコメントであり、環境全体の視点を配慮した優れた指摘である。さらに卓見と言える点は、次の⑦の言及である。すなわち、「大日如来像の如き其附近を厳重詮索一片の破片も蒐集を怠らない様したい」という指摘は、今日の文化財の保存・修復の立場から見ると、まさに先見の明であり至言である。とりわけ「厳重詮索一片の破片も蒐集を怠らない様」という見識は、今日の文化財保護のあり方を先取りしている。

（2）皇太子訪問の内容を紹介した「大分新聞」・「豊州新報」の意義

瑞典皇室の臼杵石仏訪問について、連日特別で貴重な記事として連載し続けた「大分新聞」と「豊州新報」、両紙の果たした役割は甚大であり、その意義は極めて重要である。

大分新聞（282　OT 151008　EO４）は「我社の光栄　―国賓スエーデン皇太子の御目にとまった本紙『有難う』…と御嘉納」のタイトルで次のように掲載している。

> スエーデン国皇太子、同妃両殿下御来県以来本紙は記事に写真に鋭意努力して細大漏らすなく報道するところがあつたが有難くも殿下におかせられては早くも本紙の機敏なる取扱ひに御眼をとゞめ給ひ、殊に御自分達の御行動が一々鮮明なる写真となつてあらはれ居るにはいとゞ御興深く思召された模様で幾度も幾度も本紙を繰返し御覧になつたさうである、右に付き我社は去る六日の奉迎号（特にスエーデン語を以て奉迎の意味をあらはしたる）以来本日に至るまでの本紙を取りそろへ側近者の手を通じて献上したところ殿下には日本語を以て『有難う』と仰せられ直ちに御嘉納を賜ひ御本国に御持帰りび相成ることゝなつたのは我社の無上の光栄とするところである*63。

上記の記事内容もさることながら、今日では瑞典皇太子の大分訪問の事実もそれを扱った記事の存在すら知る人も少なくなり、人々の記憶は薄れている。しかしながら、地元両紙記事の「記録」は、克明かつ雄弁に過去の出来事を記し鮮やかに蘇らせている。この点において、両紙は歴史の一齣に確実に貢献しており、研究者として大いなる喜びを覚える。

終わりに

臼杵石仏案内役として随行した濱田博士は、後年、以下のように回顧している。

> 瑞典国の皇太子グスターフ・アドルフ殿下並に同妃ルイズ殿下が、９月24日京都へ着かれてから、京都奈良各４日間の御見学を済まされ、次いで高野山に登つて大阪に出られ、神戸から宮島を経て別府に赴き、終に豊後の石仏を御覧になり、下関から朝鮮に渡られるまで、関西地方及び九州地方十余日間の御案内は、京都帝国大学の小川琢治、西田直次郎、澤村専太郎三君と吾輩とが承はることゝとなつた。此の内京都奈良は西田、澤村両君と私の三人。高野は澤村君一名、大阪から宮島は濱田一名。大分では私の外に小川氏が加はられることゝなり、私も諸友の驥尾に付して幸に其の任を果たすに大過なきを得たるのみならず、十余日の間最も忙しく、而かも最も愉快なる美術行脚を此の北欧の「プリンス」と共に始終することを得たのは、洵に私に取つて生涯忘れ難き記憶の

一となつた。（下線筆者）*64

上記の下線部は、濱田博士の心底からの偽らざる述懐と言えよう。京都帝大総力をあげての丁寧で実り多い案内となったことは事実である。

翻ってみると、瑞典皇太子は、大正15年９月24日から27日にかけて京都に滞在中、同26日に濱田博士のすすめで天塚古墳（京都太秦）を見学している。10月２日には、高野山金剛峯寺を訪問し、植樹（槙）を行っている。日本訪問後、下関から関釜連絡線で韓国に渡航された瑞典皇太子は、新羅の古都・慶州を訪問されている。その際に「瑞鳳塚」という古墳の名称は、瑞典皇太子が、出土品（金冠の鳳凰装飾）と関連づけて命名されている。

この度の調査及び執筆にあたり、ご理解とご協力を賜りました大分合同新聞社データベス部員の方々に心より感謝申し上げます。

＊１　濱田耕作『考古游記』刀江書院　1929年

＊２　鈴木希帆「スウェーデン皇太子に贈られた縄文土器」（『武蔵野美術大学研究紀要　第45号』2014年）

＊３　大分新聞・大正15年10月５日夕刊３面（＊257 OT 151005 EO 3＝大分合同新聞社・分類記号を以下併記する）

＊４　大分新聞・大正15年10月８日朝刊２面（＊272 OT 151008 MO 2）

＊５　豊州新報・大正15年10月６日朝刊１面（＊239 HT 151006 MO 1）

＊６　編集ディヴィド・クリスタル／日本語版編集主幹　金子雄司・富山太佳夫『岩波＝ケンブリッジ　世界人名辞典』岩波書店　1997年　270-271頁。なお、人名「Gustav Ⅵ Adorf」の呼称表記として以下の４つがある。①グスタヴ６世アドルフ（世界人名辞書）②グスターフ６世アドルフ（濱田耕作）③グスターヴ６世アードルフ（角田文衛）④グスタフ６世アドルフ（新聞記事）
本稿では、それぞれの出典に基づき併用したが、すべて同一人物を示す。
ちなみに、グスタヴ６世アドルフは、昭和49（1974）年（当時皇太子時代）に国王代理として湯川秀樹博士にノーベル物理学賞を授与している。『20世紀全記録』講談社　1991年　720頁参照

＊７　角田文衛『ヨーロッパ古代史論考』平凡社　1980年　465頁
なお、考古学者としての皇太子については、濱田耕作博士の詳細な一文に譲る。「考古学者としての瑞典皇太子殿下」前掲濱田『考古游記』76-84頁参照

＊８　豊州新報・大正15年10月６日夕刊３面（＊249 HT 151006 EO 3）

＊９　松村瞭：（1880-1936）大正―昭和時代前期の人類学者。明治13年８月１日生まれ。松村任三の長男。大正14年東京帝大助教授となる。東京人類学会総務幹事。昭和11年５月21日死去。東京帝大卒。
上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門『日本人名大辞典』講談社　2003年　1786頁参照

＊10　大山柏：（1889-1969）大正・昭和時代の考古学者。明治22年６月２日生まれ。大山巌の次男。大正12年ヨーロッパ留学して、H. シュミットらに先史学をまなぶ。昭和初年東京青山に大山先史前学研究所を設立。４年史前学学会を創設し「史前学雑誌」を創刊。旧石器の研究につくした。昭和44年８月20日死去。鹿児島県出身。陸軍士官学校卒。著作に「基礎史前学」「欧州旧石器時代」など。
上田正昭他『日本人名大辞典』講談社　2003年　387頁参照

＊11　下郷傳平：（２代、1872-1946）。明治－昭和時代前期の実業家。明治５年３月16日生まれ。初代下郷傳平の長男。明治29年近江製糸の社長となり、全国有数の製糸会社にそだて、長浜銀行頭取、長浜町長などもつとめる。福祉目的の下郷共済会の設立、図書館・美術館の開設、伊吹山高層気象観測所の建築寄付など、社会・文化事業につくした。昭和21年１月15日死去。75歳。滋賀県出身。前名は久成。
上田正昭他『日本人名大辞典』講談社　2003年　945頁参照

＊12　前掲鈴木論文・収録表２参照

＊13　前掲濱田『考古游記』

＊14　前掲濱田『考古游記』32頁

＊15　同書43頁

＊16　大分新聞・大正15年10月６日夕刊３面（＊265 OT 151006 EO 3）

舞子住友別邸については、以下の Web サイト参照。http://www.maikovilla.co.jp/history/　2016. 10. 27アクセス

「元は有栖川宮熾仁（たるひと）親王の別邸（現在の舞子ビラ神戸の場所）を示す。明治28年熾仁親王ご逝去後、大正６年７月には住友家が譲り受けて、迎賓館として用いられた。終戦直後、米軍に接収、昭和25年解除後ホテルトウキョウの支店を経て、昭和34年にオリエンタルホテルに引き継がれ『オリエンタルホテル舞子ビラ』となった。昭和41年に神戸市が買収、同45年『市民いこいの家舞子ビラ』として新発足。昭和56年別館を増館、有栖川宮ご別邸跡としての由来で広く親しまれた。現在の本館は、平成10年にグランドオープン」と記す。現在地は次の通り。〒655-0047　神戸市垂水区東舞子町18-11　シーサイドホテル舞子ビラ神戸。

＊17　山縣治郎（1881-1936）。明治－昭和時代前期の官僚。明治14年１月６日生まれ。内務省に入る。神奈川、兵庫などの県警察部長、内務監査官、初代都市計画局長などを歴任し、石川、広島、兵庫、神奈川の各県の知事をつとめた。昭和11年１月９日死去。56歳。山口県出身。東京帝大卒。

上田正昭他『日本人名大辞典』講談社　2003年　1956頁参照

広島県庁 Web サイトで確認すると、大正12年10月25日～大正14年９月16日まで広島県知事を勤めていることが判明する。https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/7/1295247669837. html　2016. 10. 29アクセス

＊18　下記 Web サイトによると保倉税関長は、保倉熊三郎を示す。保倉熊三郎は、大正15年４月神戸税関長の任にあった。

神戸大学経済経営研究所　新聞記事文庫　27（208-10581）大阪朝日新聞　1926. 4. 22（大正15）

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?METAID=00866772&TYPE=HTML_FILE&POS=1&LANG=null　2014. 8. 8アクセス

また、次の大正15年11月の記事からも神戸税関長の任にあったことが判明する。

神戸大学経済経営研究所　新聞記事文庫　財政（23-049）大阪朝日新聞　1926. 11. 28（大正15）

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/ContentViewServlet?METAID=10036583&TYPE=HTML_FILE&POS=1&LANG=JA　2014. 8. 8アクセス

さらに下記の昭和２年大阪朝日新聞記事によると、当時も現神戸税関長の任に保倉熊三郎が就いている。

神戸大学経済経営研究所　新聞記事文庫　銀行（27-251）大阪朝日新聞　1927. 12. 20（昭２）

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=00755016&TYPE=IMAGE_FILE&POS=1&LANG=JA　2014. 8. 8アクセス

＊19　黒瀬市長は wikipedia によると「黒瀬弘志：明治16年（1883）１月７日―昭和18年（1943）11月10日。日本の警察官僚、政治家。第26代山梨県知事（４月28日就任、４ヶ月後神戸市長へ就任）、第７代神戸市長（在任：1925年８月17日―1933年８月16日）。熊本県出身」と記す。

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%BB%92%E7%80%AC%E5%BC%98%E5%BF%97　2016. 10. 27アクセス

下記 Web サイト神戸市立中央図書館資料案内ブックリスト郷土編 No４の「歴代の神戸市長一覧」に第７代黒瀬弘志と記す。

http://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/library/ref/link70.html　2016. 11. 03アクセス

＊20　大分新聞・大正15年10月６日夕刊３面（＊265 OT 151006 EO 3）

上記記事中の「三時半」について、濱田の認識と齟齬が見られたので、確認を試みた結果次のことが判明した。新聞記事には、漢数字「三」と覚しき数字あり。ただし、時間の流れと下記の濱田の記録と照合した上で判断すれば、明らかに「三」は間違いと思われる。すなわち、『考古游記』（49頁）には、「朝９時半神戸を出帆」と明記されている。

＊21　軍艦木曽：二等巡洋艦。長さ152.4m、幅14.17m。排水量5,500t。速力36.0kt。出力90.000馬力。1921年、三菱長崎造船所で竣工。

呉市海事歴史科学館編・監修者戸高一成『呉市海軍歴史科学館図録　福井静夫コレクション傑作選日本海軍艦艇写真集　巡洋艦』ダイアモンド社　2005年　156頁（写真）249頁（要目・艦歴一覧）参照

＊22　大分新聞・大正15年10月６日３面夕刊（＊265 OT 151006 EO 3）

＊23　下記 Web サイトによると宮島ホテルは「大正６（1917）年７月29日ヤン・レツル設計で大元公園に『宮島

ホテル』竣工」と記す。
宮島観光協会 HP http://www.miyajima.or.jp/history/chronology.html　2016. 10. 27アクセス

＊24　下記 Web サイトによると岩惣ホテルの現在の場所は、〒739−0522　広島県廿日市市宮島町もみじ谷　みやじまの宿　岩惣（いわそう）にあたる。http://www.iwaso.com/　2016. 10. 30アクセス

＊25　下記Webサイトによると「第20代広島県知事・末松偕一郎就任期間：大正15年９月28日～昭和２年11月７日」と記す。広島県 HP https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/7/1295247669837.html　2016. 10. 30アクセス
下記 Web サイトによると末松偕一郎は、昭和17年10月20日から昭和21年10月19日まで第８代別府市長の任にあった。別府市 HP https://www.city.beppu.oita.jp/sisei/toukei_housei/detail99.html　21・付録「歴代市長」2016. 10. 30アクセス

＊26　濱田『考古游記』49頁

＊27　大分新聞・大正15年10月６日夕刊３面（＊265 OT 151006 EO 3）

＊28　濱田『考古游記』50頁

＊29　内火艇とは、内燃機関で走る小舟。ランチ（launch）とも言う。ランチは港湾内での連絡や人・荷物の輸送などに使われる。快速で機動性のある舟艇。監修・松村明『大辞泉』小学館　1998年　1953頁及び2764頁参照

＊30　大分新聞・大正15年10月５日夕刊３面（＊257 OT 15005 EO 3）

＊31　安保呉海軍鎮守府司令長官は、次の記事（人事消息箇所）から安保清種と判明する。「人事消息：安保清種呉海軍鎮守府司令長官　六日来別日名子止宿、七日午前七時五十六分別府駅発上り列車にて門司に向けて出発」大分新聞大正15年10月７日夕刊３面（＊273 OT 151007 EO 3）
ちなみに、下記人名辞典によると以下のとおりの紹介となる。
「安保清種（あぼきよかず）：1870−1948。明治から昭和時代にかけての軍人。明治３年（1870）10月15日海軍大佐澤野種鉄の三男として佐賀で生まれたが、のち初期日本海軍の長老であった男爵阿保清康海軍中将の養嗣子となった。佐賀中学を経て同二十四年海軍兵学校を卒業。日清・日露の両海戦参加後、イギリス留学。第二艦隊参謀長を経てイギリス大使館付武官、戦艦安芸艦長ののち大正５年（1916）少将に進級。軍令部第一班長（作戦）から９年中将、軍令部次長と順調に軍令系統の要職を累進し、さらに同12年艦政本部長、13年海軍次官、14年呉鎮守府司令長官を歴任。昭和２年（1927）大将に昇進、５年のロンドン軍縮会議には軍事参議官のまま出席した。そしてロンドン条約批准をめぐる軍縮派と艦隊派の対立を収拾するため、その中間的立場を買われて５年10月海軍大臣に就任した。両派の相克を解消することはできなかった。同６年12月若槻内閣の総辞職とともに、海相を大角岑生に譲って軍事参議官に写ったが、同９年１月予備役に編入された。昭和23年６月８日没。79歳」と記す。
編集白井勝美・高林直助・鳥海靖・由井正臣『日本近現代人名辞典』吉川弘文館　2001年　33頁

＊32　大分新聞・大正15年10月８日朝刊２面（＊272 OT 151008 MO 2）。この箇所を詳述すると以下の通りである。「午後５時55分奉迎の煙火数発、安保海軍中将の案内で汽艇に召され上陸」（＊272 OT 151008 MO 2）

＊33　油屋熊八の経営する旅館。当時の記事では「御宿泊の光栄に浴した亀の井ホテルでは一昨年新築した中央のホテルと決定し御宿二階十畳くらいの部屋を御居間にあてる事になり、云々」と書かれている。大分新報・大正15年10月５日夕刊３面（＊257 OT 151005 EO 3）

＊34　双川警察部長は、双川喜一を示す。大正14年９月16日、前任地の香川県警察部長より大分県警察部長へ就任。後任地は滋賀県警察部長。千葉県出身。編集・大分県警察史編さん委員会『大分県警察史　第一巻（明治・大正・昭和前期編）』大分県警察本部　昭和61年（非売品）／　三　歴代幹部名簿　（一）歴代警察本部長　978頁参照。

＊35　別府の老舗旅館の一つ。下記 Web サイトによると伊藤博文が「霊泉館」と別に命名。また、大正15年版吉田初三郎筆の鳥瞰図が残っている。http://today.blogcoara.jp/natukashi/2011/01/no1136.html　2016. 10. 30アクセス

＊36　大分新聞・大正15年10月５日夕刊３面（＊257 OT 15005 EO 3）。時刻について濱田の記録では「午後２時50分出発門司へ」濱田『考古游記』52頁参照。

＊37　下記 Web サイトによると「山陽ホテル」は旧山陽ホテル（現下関 JR ビル）。説明によれば「大正12年辰野金吾・葛西建築事務所設計、鉄筋コンクリート造３階建、大陸渡航の皇族や政府高官が必ず利用した西日本唯一の本格的ホテルであった。住所　下関市細江町3−2−7」という。
http://www.geocities.jp/tarasuko33/sanyohotel.html　2011. 08. 11アクセス

「下関市内近代・現代建築MAP」参照　http://www.sujet.co.jp/matiyoso/05kindai/map−simo/1.html 2016. 10. 30アクセス

＊38　昌慶丸。濱田『考古游記』52頁。ただし、景福丸とする大分新聞記事（＊285 OT 151009 MO 7）がある一方で、豊州新報（＊264 HT 151009 MO 2）は、昌慶丸と記す。筆者は随行された濱田博士の記述に従う。両船共関釜連絡線。wikipediaによると昌慶丸は、大正12年３月12日就航、昭和18年７月15日発令にて博釜航路へ。景福丸は、大正11年５月18日就航、昭和19年10月２日から博釜航路へ。
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%A2%E9%87%9C%E9%80%A3%E7%B5%A1%E8%88%B9 2016. 10. 30アクセス

＊39　濱田『考古游記』52頁

＊40　特務艦「勝力（かつりき）：（敷設艦）」：排水量1, 540t　竣工年月日；大正６年１月15日　建造所；呉　記事；昭和17年７月20日敷設艦より。
呉市海事歴史科学館編・監修者戸高一成『呉市海軍歴史科学館図録　福井静夫コレクション傑作選　日本海軍艦艇写真集　巡洋艦』ダイアモンド社　2005年　212頁（写真）・257頁（要目・艦歴一覧）参照

＊41　特設艦とは、民間船を徴用し、海軍所属の艦艇としたもの。寺田近雄『日本軍隊用語集』立風書房　1992年　167頁参照

＊42　豊州新報・大正15年10月６日夕刊３面（＊249 HT 151006 EO 3）

＊43　大分新聞・大正15年10月５日夕刊４面（＊250 OT 151004 EO 4）

＊44　この場面の記事では、オースプリンクと記されるが、大分新聞大正15年10月８日夕刊４面（＊282　OT 151008 EO 4）によると、侍従武官コスタ、オースプリング大尉と記載されている。

＊45　山縣式部官：山縣武夫宮内省式部官を示す。人事消息の欄に職位・姓名を明示し「瑞典皇太子殿下随員として六日来別亀の井」と見える（＊273 OT 151007 EO 3）。また「瑞典国皇太子同妃殿下接伴掛　式部官　山縣武夫」と記す記事もある（＊289 OT 151009 EO 3）。

＊46　武藤外務事務官：武藤義雄外務省事務官を示す（＊273 OT 151007 EO 3）

＊47　相馬式部官：相馬孟胤（たけたね）外務省事務官を示す（＊273 OT 151007 EO 3）。下記の人名辞典では次のとおり。
「相馬孟胤：（1889−1936）。大正－昭和時代前期の華族。明治22年８月14日生まれ。相馬順胤（ありたね）の子。東京帝大で植物学を研究。宮内省にはいり新宿御苑に勤務。大正11年式部官になり、のち楽部長を兼ねる。欧米、インドを漫遊。能楽の大衆化をはかり、昭和10年日比谷音楽堂で雅楽を公開した。子爵。昭和11年２月23日死去。48歳。東京出身」と記す。上田正昭他『日本人名大辞典』講談社　2003年　1060頁参照

＊48　田畑属は、田畑貞信宮内属を示す（人事消息欄に姓名　＊273 OT 151007 EO 3）

＊49　中根属は、中根信尾宮内属を示す（人事消息欄に姓名　＊273 OT 151007 EO 3）

＊50　総計二十一名。実際の記事では「総計一十一」と見えるが、当該記事内容を判断すれば「二十一」が正しいので、表３では筆者が訂正して掲載した。

＊51　濱田『考古游記』P53頁参照

＊52　亀の井ホテル洋室。大分新聞・大正15年10月７日夕刊３面（＊273 OT 151007 EO 3）

＊53　大分新聞・大正15年10月７日夕刊３面（＊273 OT 151007 EO 3）。見出しに「実に無上の光栄　亀の井ホテル主人感激して語る」とある。

＊54　豊州新報・大正15年10月７日朝刊７面（＊253 HT 151007 MO 7）
なお、タイトルは当初の掲載形式のままを維持したが、本文は、本稿編集の都合により、元の体裁の１行内収録字数を増やし、基本的に本稿の紙幅にあわせた長さの文章に変更を行った。下線と番号は便宜上筆者が加筆。なお、濱田耕作『豊後磨崖石仏の研究』（京都帝国大学発行／岩波書店　大正14年）については、以下の拙稿の中で具体的に詳論した。仲嶺真信「大正期における臼杵石仏の研究について」（『芸術学論叢№12』別府大学文学部美学美術史学科　1996年）。

＊55　千葉県の柏井貝塚。角田文衛『ヨーロッパ古代史論考』平凡社　1980年　465頁参照

＊56　濱田『考古游記』81−82頁参照

＊57　「豊後の石仏」と題して記す。濱田『考古游記』51−52頁参照

＊58　小城長次郎については、小城長次郎『六不之生涯　小城長次郎日記』（関東図書株式会社　平成25年）という貴重な日記が残されている。また、『秘蔵写真集　目で見る大分百年』（大分合同新聞社　昭和61年）収録写真の中に、瑞典皇太子を臼杵石仏にご案内する姿が撮影されている。仲嶺真信「臼杵石仏の紹介と研究―小城長次郎の日記を中心に―」（『別府大学大学院紀要第19号』別府大学会　2017年）参照

＊59　大分新聞・大正15年10月６日夕刊３面（＊265 OT151006 EO 3）
＊60　大分新聞・大正15年10月７日夕刊３面（＊273 OT151007 EO 3）
＊61　豊州新報・大正15年10月８日夕刊３面（＊265 HT151008 EO 3）
＊62　豊州新報・大正15年10月８日夕刊３面（＊265 HT151008 EO 3）
＊63　大分新聞（282 OT 151008 EO 4）（同紙には、奉迎舞踏会の記事について、さらに夕刊百部を所望された旨が掲載されれいる。282 OT 151008 EO 4）
＊64　濱田『考古游記』P32頁参照。文中の小川琢治博士については、以下の拙稿において、『日本石仏小譜』に収録された臼杵石仏関連の古写真と関連づけて具体的に言及した。仲嶺真信「『日本石仏小譜』と小川琢治博士」（『芸術学論叢№13』別府大学文学部美学美術史学科　1999年）

図版出典

図１　豊州新報　大正15年10月６日朝刊１面
図２　豊州新報　大正15年10月７日夕刊１面
図３　大分合同新聞社提供
図４　大分新聞　大正15年10月８日朝刊７面